KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

咽び泣くオデュッセウス：デモドコスの歌についての若干の考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部
	公開日: 2016-09-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 丹下, 和彦
	メールアドレス:
	所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006296

関西外国語大学 研究論集 第80号（2004年8月）
Journal of Inquiry and Research, No.80 (Aug. 2004)

咽び泣くオデュッセウス

——デモドコスの歌についての若干の考察——

丹 下 和 彦

はじめに

トロイア戦争を戦った戦士たちは英雄（ヘロス、ヘロエス）と呼ばれる。『イリアス』第2歌に言う、「軍神アレスに仕えるわがダナオイ軍の勇士たち ἥρωες Δαναοί よ」[1]（*Il.* 2. 110）と。英雄とは一言で言って強い男である。膂力においても胆力においても。キケロはピロクテテスを論じる際に、強い男の条件として「強い意志、毅然たる態度、忍耐、この世の出来事へのとらわれを捨てること」を挙げた[2]。これはキケロ風の英雄観とみてよい。ここでは膂力の強さは挙げられていないが、それは戦士にはあまりにも当然なものとして略されているとみなしてよいであろう。

ところがこの強いはずの英雄が、実はよく泣くのである。ピロクテテスは毒蛇に咬まれた傷の痛みに耐えかねて号泣を発し、ゆえにキケロから「強い男 vir fortis」に非ずと非難された[3]。ヘラクレスでさえネッソスの毒血による断末魔の苦痛に絶叫したのである[4]。同じくトロイアでの英雄であるアキレウスも泣く。『イリアス』冒頭で愛妾ブリセイスをアガメムノンに奪われたアキレウスは、その屈辱と怒りの思いを母テティスに泣いて訴える（*Il.* 1. 349、357）[5]。ただしこの場合はピロクテテスやヘラクレスのように肉体の傷の痛みに泣くのではない。言ってみれば心の傷の痛みに泣くのである。いずれにしても毅然たる態度また忍耐に欠ける行為という点では同列である。

オデュッセウスもまた泣く[6]。カリュプソの島では故郷恋しさに海岸へ出て不毛の海を眺めながら涙をこぼす（*Od.* 5. 82、156～58）。イタケへ帰着し、息子テレマコスと再会したときも涙を流す、「それまではじっと耐えてきた涙を、頬を伝わらせて地上に落した」（*Od.* 16. 190～91）[7]。望郷の涙あり、再会の感涙ありというところだが、この外にもオデュッセウスには涙を流すところがいま一つある。そこで流される涙は彼のどの涙とも違うように思われる。

また、彼以外の英雄の涙、アキレウスのそれ、あるいはピロクテテスのそれともまた異質であるように思われる。それはオデュッセウスがアルキノオスの宮廷で流す涙である。それをいま少し詳しくみてみたい。それは他の涙とどう違うのか。

1．オデュッセウス、泣く

『オデュッセイア』第8歌に、オデュッセウスが2度涙を流す場面がある。1度は、アルキノオス王の宮廷での宴会の席上、楽人デモドコスがトロイアの勇士の功業を歌った際である。それは「当時その評判が広大な天にも届いていた物語の一節」(*Od.* 8．74) で、オデュッセウスがさる宴席でアキレウスと激しい口論を演じ、それを見たアガメムノンが心中ひそかにほくそ笑むといった話であった[8]。はからずもオデュッセウスは、自分のかつての行状を物語化された話の中で聞くことになる。そして彼は泣くのである。その時の様子は次のように描写されている、「高名の楽人は、このような物語をうたったが、オデュッセウスは紫色の大きい外衣を逞しい手でつかむと、頭からすっぽりと被(かぶ)り、端麗な顔を隠した。パイエケス人の手前、眉の下から涙をこぼすのを恥じたからで、至妙の楽人がうたいやめるごとに、涙を拭って外衣を頭から外し、把手二つの盃を手に取っては、神々へ酒を献じていた」(*Od.* 8．83～89) と。この涙は誰にも気づかれることはなかったが、唯一人隣りに坐っていたアルキノオス王のみがこれに気づき、悲しみの涙と見て取ったが、その心中を思い遣るかのように一同に宴会をやめて戸外で運動競技に興じるよう提案する。これが第一の涙の場である。それにしてもなぜオデュッセウスは泣いたのか。

二度目は戸外での運動競技を終えた日暮れどきである。もう一度アルキノオス王の宴席に連なったオデュッセウスは、楽人デモドコスに自ら声をかけ、先ほどの歌いぶりを誉めたあと、今度は己の希望する歌を注文する。「エペイオスがアテネのお助けを得て作り成し、名に負うオデュッセウスが、後にイリオスを陥れた将兵をその腹中に潜ませ、敵を欺く罠として敵の城内に運び入れた」(*Od.* 8．493～95) あの木馬の物語[9]である。これを受けてデモドコスは、注文通りオデュッセウスの一隊がすでにトロイアの広場に在って、木馬の腹中に潜んで待機しているところから歌い始め、「楽人はさらに歌い続けて、アカイアの子らが、その潜んでいた木馬の腹中を抜け出し、次々に木馬から躍り出て、町を破壊し尽す有様、またアルゴス勢が思い思いに各所に散って険しい城市を荒らし廻り、さらにはオデュッセウスが軍神アレスの如き勢いで、神と見紛うメネラオスと共に、デイポボスの屋敷に向かったこと、ここで世にも凄まじい激戦を敢えて挑み、心宏きアテネの神助によって、遂に勝利をおさめたことなどを語った」(*Od.* 8．514～20)。

この、それでもってほとんどトロイアの死命を制した観のある自らの計略と奮戦ぶりを聴い

たオデュッセウスは、しかしまたもや涙を流し始める。勝ち戦における自らの華々しい活躍が歌い上げられているのにである。しかもその泣き方が尋常ではない。その様子は比喩を使って次のように描写されている。「高名の楽人はこう歌ったが、オデュッセウスは打ち萎れて、瞼に溢れる涙は頬を濡らした。そのさまは、己が町己が子らを、無残な敗戦の目に遭わすまいと、祖国と同胞の見守る前で戦って討死にした夫にすがり泣き伏す妻の姿を見るよう、断末魔の苦しみに喘ぐ夫の姿を見るや、その傍らに崩おれてよよと泣く、それを敵兵たちが、背後から槍で背と肩とを打ちつつ、苦役と悲歎の待つ隷従の日々へと曳いてゆき、女の頬は世にも憐れな悲歎のうちに、やつれ青ざめる――それに劣らず悲しげに、オデュッセウスは眉の下から涙をこぼした」(*Od.* 8. 521~31) というのがそれである。泣くだけでもその真意が量りかねるのに、この泣き方の異常さはどうであろうか。勝利した側の将が、敗軍の将の妻がその悲惨な身の上を嘆いて泣く、それと同質の涙を流したというのである。これは尋常な泣き方ではない。そしてまたこれは、異郷にあって故郷恋しさに流す望郷の涙ではないし、またようやく故国に帰り着き息子テレマコスとの再会を喜ぶ感激の涙でもないことはもちろんである。

この涙に気づいたのはまたもやアルキノオス王一人だけである。今度は彼も不審感を抑えきれず、一座の面前で涙の理由を明かすよう、そしてまたなによりもその身分を明らかにするようオデュッセウスに要請する。オデュッセウスはこれを断りえず、身の上を明らかにした上で来し方の長い漂流譚を物語る運びとなる。

以上が作中でもことに特異な〈オデュッセウス泣きの場〉である。

2．なぜ泣くのか

最初の涙は、トロイア攻めのさなか自分がアキレウスと論争したことがあったのを、デモドコスが歌うのを聞いて流した涙である。この逸話は、この箇所以外に触れられたことがなく、詳細は不明である。ただしかしこの歌物語の内容がオデュッセウスに格別に精神的にも肉体的にもダメージを与えたようには思われない。つまり彼を泣かせる具体的な理由は、わたしたちにはみつからないのである[10]。

二度目の涙は木馬の計略の条りを聞いたときに流されたものであった。このときは自ら聞かせてくれとデモドコスに所望した演目であったし、またそれはギリシア軍の勝ち戦の模様を歌ったものであった。ここにもまたわたしたちは彼の涙の格別な理由を見つけることは困難である。なぜオデュッセウスは泣いたのか。しかも二度も。

わたしたちと同様に涙のわけをいぶかしがるのはアルキノオス王である。彼は満座の中でただ一人オデュッセウスの流す涙に気づいていたが、二度目についにいたたまれずその理由を問い質すことになる。わたしたちは涙を流している男がオデュッセウスであることを知っている。

トロイアで10年間苦労したのちさらに10年間諸方を放浪し歩いている身であることを知っている。アルキノオスはそれを知らない。彼が知っているのは、この男が己の領地へたった一人で漂着した流れ者であるということだけである。名前もまだ明らかにされていない。その男がトロイア戦争を歌う物語を聞いて涙を流した。アルキノオスはまず身の上を明かすようにと要請する（この点はわたしたちにはすでに明白である）。そして、トロイアにまつわる歌を聞いて涙したところから、自らの推測を交えつつその理由を質す、「そなたの姻戚でどなたか優れたお人がイリオス城下で討死にされたのか。〈略〉あるいはまたそれは、そなたと心の通い合う、立派な戦友でもあったのか」（*Od.* 8. 581～85）と。あとの問いはわたしたちの疑惑とほぼ一致する。わたしたちも、この男がオデュッセウスと知った上で、なぜ彼はトロイアにまつわる物語を聞いて、しかも自ら所望した木馬の計略の場を聞いてあのように激しく泣くのか知りたいからである。木馬の計略は、トロイア攻略に画期的な功績として自他ともに認められたものであった[11]。しかしオデュッセウスはこの自らの戦歴を飾る勲功を涙で受け容れるのである。しかもその泣き方が異様である。斃れた敗軍の将の妻女が死せる夫とあとに残されたわが身の悲運を嘆く、そのように激しく泣く理由はなになのか。アルキノオスは、身内の者かあるいは親しい戦友を戦闘で失ったからではないかと推測する。これは半ば当り、半ばはずれている。木馬の腹に潜んでいたアカイア勢の何人かは戦闘で命を落したであろうが、彼らは格別オデュッセウスの身近な存在であったとは思われない。そう思わせる記述はない。彼が誰かしら味方の者の死を悼むとしても、あれほどの激しい泣き方はどうもふさわしくないのである。

オデュッセウスに関してアルキノオスよりも情報量の多いわたしたちの思惑はさて措くとしても、上のアルキノオスの要請――オデュッセウスの身の上を明かすことと、涙した理由を明らかにすること――はしごくもっともなことである。そしてわたしたちも涙のわけだけは聞きたいのである。ところがオデュッセウスは、請われて身の上は明らかにする（*Od.* 9. 16ff.）が、流した涙の訳は一切語らない。身内か戦友を亡くしたからではないかというアルキノオスの推測も黙過したままである。名前を名乗り生れ在所のイタカへの望郷の念を表明したあと続けて語るのは、実はアルキノオスの要請になかった戦後の漂流譚である。「ではこれから、トロイエから帰国の折に、ゼウスがわたしの身に降された、悲惨な旅についても語らせていただこう」（*Od.* 9. 37～38）。頼まれもしない冒険譚をここにもち出した理由はなにか。

涙のわけを本人が明らかにしない以上、わたしたちはこれを推測する以外にない。それまでして知りたいと思うのは、彼の泣き方が異常であったからである。アルキノオスの推測は肯定も否定もされず、黙過された。他にわたしたちはどう推測できるだろうか。ある現代の評家は、オデュッセウスが泣くのは失われた同僚将兵と、勝ち戦ではあるがそれのもたらす悲しみのゆえであるとする[12]。これはアルキノオスの推測するところとほぼ一致する[13]。ただアルキノオスは、この男がトロイアで勝利した側なのか敗れた側に関係する人間であるのか判然としてい

ないから、その涙を勝敗いずれにせよ戦うことで傷ついた者の涙と解している。そうわたしたちは解釈できる。しかしわたしたちはこの涙を流す男が勝利したギリシァ方の人間であることを知っている。しかも自ら木馬の腹中に潜んで、トロイア方に最後のとどめを刺す役割を演じたのであった。勲功著しいはずのそのオデュッセウスが自らの功を誇るどころか、激しく泣く。そこにわたしたちは違和感をもったのである。なぜ彼は泣くのか。

3．涙のわけ

本人が語らぬとあれば、わたしたちもまた推測を逞しくする外ない。二度の涙の場をもう一度検証してみよう。最初に涙する条りは以下のように描写されている、「……やがて飽食の欲を追いはらった時、詩神は楽人を促して、勇士らの功（いさお） κλέα ἀνδρῶν をうたわせた。うたった条りは当時その評判が広大な天にも届いていた物語の一節で、すなわちオデュッセウスと、ペレウスが一子アキレウスとの争いの物語」（*Od.* 8. 72～75）と。“勇士らの功（いさお） κλέα ἀνδρῶν”とは、Stanford の言うごとく[14]英雄物語の本質的主題となるものである。英雄同士の葛藤に時に、アガメムノンとアキレウスのそれのごとく、涙がからむことはあるとしても、ここはそのような場ではない。少くともオデュッセウスにとっては。先に挙げた古注によれば、この逸話ではオデュッセウスは論争に勝利したとみなされるだけにならおさら涙とは無縁のはずである。しかし10年前に終了したトロイア戦争がすでに物語化されて第三者に提供された場合、フィクションとして聞く聴衆はこれを喜んで聞くとしても、物語の素材となって作中に登場するオデュッセウスにはまた別の感慨があるのかもしれない。その間の消息を告げるかのような条りがある。「しかし楽人のうたう物語に興の乗ったパイエケスの領主たちが促すままに、楽人が再びうたい始めるとそのたびごとに、オデュッセウスもまた再び頭を覆って、悲しげに呻くのであった」（*Od.* 8. 90～92）というのがそれである。大事件を実際に体験した者には、余人には知られえぬ悲しみや悩みがあるかのごとくである。それは、物語の受容者にすぎないパイエケスの領主たちには追体験しえない原体験とでもいうべきものであろう。栄光についてまわる悲愁であろう。

二度目に涙する場合はどうであったか。このときオデュッセウスは楽人デモドコスに自ら所望して木馬の計略の場面を歌わせたのであった。その条りを再録してみる。「デモドコスよ、そなたは世の誰にも優る歌の名人と感じ入った。そなたに歌を教えたのは、ゼウスの姫、ムーサか、あるいはアポロンであったのであろう。そなたのうたうアカイア勢の運命――アカイア人たちの天晴れな働きと、彼らの身に起ったことごと、ことにその数々の苦難の物語はまことに見事 κατὰ κόσμον であった。さながらそなたがその場にあったか、あるいは（その場にいた）誰かから聞いたかのような生々しさであった。しかし今度は趣きを変え、木馬作りの

条りを歌ってくれぬか――エペイオスがアテネのお助けを得て作り成し、名に負うオデュッセウスが、後にイリオスを陥れた将兵をその腹中に潜ませ、敵を欺く罠として敵の城内に運び入れた、その木馬の物語をじゃ。もしそなたがこの物語を見事に κατὰ μοῖραν 語ってくれたならば、わたしは直ぐにも世の人々すべてに向って、神はそなたには自ら進んで霊妙の歌をお授けになされたといって吹聴しよう」(*Od.* 8. 487～98) というのがそれである。

ここではまず楽人デモドコスの技倆が称讃されている。先にオデュッセウスが聞いたその歌いぶりはきちんとしていて、過不足なく、順序よく κατὰ κόσμον 歌われたものであり、かつ歌い手デモドコス本人がその場にいたか、あるいはその場にいた者から聞いたかのような生彩のあるもの ὡς τέ που ἢ αὐτὸς παρεὼν ἢ ἄλλου ἀκούσας であったと言われている。そして今度はその技倆でもって木馬の計略の段を歌ってくれと要求し、もし今度もまた適切に κατὰ μοῖραν 歌ってくれるなら、その秀れた技倆を世に喧伝しようとまで言う。ここで求められているのは、かつてあった出来事をありのままに的確に再現してみせる表現力である。デモドコスはその技倆を十全に発揮してアキレウスとオデュッセウスの論争の場を歌った。そしてそれを聞いたオデュッセウスは涙を流したのであった。泣くような場面ではないと思われるのに泣いた。デモドコスの歌いぶりにそうさせるだけの霊妙の力が宿っていたのか。しかしこの時点でオデュッセウスは自分の涙に関しては何の感慨も漏らしていない。一切触れることなく、ただデモドコスの技倆を誉めているだけである。デモドコスの楽人としての卓越した技倆がオデュッセウスの涙を誘発したということはありうるが、それにはやはり誘発する原因、涙の素になる出来事の思い出がなければならないだろう。しかし語られた逸話にそれらしいものを、わたしたちは見つけられないでいるのである。

さて、デモドコスはオデュッセウスの要求どおり木馬の計略の段を歌う。それを聞いたオデュッセウスはまたもや涙を流す。なぜここで彼は泣くのか[15]。しかもその泣き方が尋常ではない。「祖国と同胞の見守る前で戦って討死にした夫にすがり泣き伏す妻の姿をみるよう」(*Od.* 8. 523～25) な泣きようであるという。勝ち戦を歌い上げる歌を聞いて、なぜ敗軍の将の妻のごとくに泣かねばならないのか。なぜ城を落した勝利者の将軍が敗死した将の妻女のごとくに泣かねばならないのか。それは先述の Stanford の言うような、自軍の同僚の死を悼み、勝利はしてもそれのもたらす悲惨な結末を悲しむためだけに終るとは思えない。敗軍の将の妻のように泣いたというのは、その妻の身に成りかわって泣いたという謂である。ここには自軍の将兵の死への追悼だけではなく、それを越えた敗者の側の死――戦争がもたらした災禍――への追悼の意も籠められているのではないかと思われる。

4．鬱々たるオデュッセウス

ここまでオデュッセウスの気持を忖度するのは理由がないことではない。オデュッセウスがデモドコスに木馬の計略の条りを所望したとき、彼はどうやら自らの功績を確認したいがためだけではなかったようなのである。歌を注文する直前にオデュッセウスはこう言っている、「近習の方よ、さあこの肉をデモドコスに与えて食わしてやって下さい、悲しみに心晴れぬわたしではあるが ἀχνύμενός περ、わたしの親愛の気持を彼に伝えたい」(*Od.* 8.477～78)と。

オデュッセウスは、自分は“悲しみに心晴れぬ ἀχνύμενος”と言っている。それは現在の状態がそうだというのか、それともずっと以前からそうだったというのであろうか。心中の愁い悲しみを表わす言葉 ἄχνυμαι（ἄχομαι、ἀκαχίζομαι、ἀχεύω、ἀχέω）は、ホメロスではしばしば使用されている[16]。近いところでは『オデュッセイア』第7歌297行に、ここと同様分詞の形 ἀχνύμενός περ がみえている。そこはオデュッセウスが初めてアルキノオス王と妃アレテに対面し、パイエケス人の島に漂着しナウシカアに救助された次第を物語る条り、「(お嬢さまは) パンときらめく葡萄酒とをたっぷり恵んで下さったばかりか、河で水浴をさせてこの着物まで下さったのです。以上、辛い気持を抑えつつ ἀχνύμενός περ、ありのままにお話しいたしました」(*Od.* 8. 295～97) と話し終えるところである。難破と漂流という過去の体験はオデュッセウスの心を暗く悲しく惨めにする。それをじっと耐えつつ顛末を物語ったというのである。苦労話を再話することは痛みを再体験することに外ならない[17]。その再体験された苦労の痛みを伴った表出が ἀχνύμενος なる語である。第7歌297行の ἀχνύμενος なる表現の具体的内容は、難破と漂流体験であろう。それでは第8歌の478行の ἀχνύμενος なる表現の具体的内容は何であろうか。

アルキノオス王の宮廷の楽人デモドコスはオデュッセウスが滞留し、王主催の宴会に出席した折、計3回歌物語を歌う。そのうち2回はすでに言及したトロイア戦争にまつわるものである。そしていま一度は、これまでわたしたちは言及してこなかったが、この二つのトロイアでの物語の中間にギリシア人にお馴染の神話、アプロディテとアレスの情事、浮気妻アプロディテを懲らしめるヘパイストスの物語が歌われていたのである。このトロイアとは一見無関係な神話物語が終り[18]、3回目の歌、木馬の計略の物語に入る直前、先に引用したように、オデュッセウスはデモドコスに親愛の情を伝えるためだとして馳走の中から猪の背肉を分け与え、そしてその折に ἀχνύμενος なる語を発するのである。“悲しみに心晴れぬわたし”と。第二の歌を聞いてパイエケス人とともに“心楽しませた τέρπετ' ἐνὶ φρεσὶν”オデュッセウスであったが、それは長く続かなかった。いまこの ἀχνύμενος なる彼の心情の具体的な内容は何であると考えられようか。

デモドコスの第1の歌を聞いたときオデュッセウスは涙を流した。第2の歌、すなわちアプ

ロディテ、アレス、ヘパイストスの3人の神々をめぐる神話物語を聞いたとき、彼はパイエケスの貴族らとともにこれを喜んだ。「高名の楽人はこのように歌ったが、これを聞いてオデュッセウスも、長き櫂を用い、船に名高きパイエケス人たちも、ともに心を楽しませた τέρπετ' ἐνὶ φρεσίν」(*Od.* 8. 367〜69) というのがそれである[19]。

ここにオデュッセウスの対照的な二つの心情が披瀝されているのを、わたしたちは認めえよう。そしていま彼が心悲しませているのは、第2の歌を聞いたからではもちろんない。それはおそらく第1の歌、すなわちトロイアでの出来事を歌に聞いたからであろう。あのとき流した涙がまだ彼の心中に尾を引いているのである。そう推察される。ἀχνύμενος の具体的な内容はトロイア戦争である。その後の苦労(漂流)も彼の心を苦しめこそすれ宥めるはずはないから、いまの鬱々たる気分に少なからぬ影を落しているとは考えられるが、心中の愁いの第1の要因はやはりトロイア戦争でなくてはならない。このあとデモドコスの第3の歌(木馬の計略の段)を聞いたときもまた彼は涕泣するのであるから。どうやら彼にとってトロイア戦争は、たとえ勝ち戦であっても激しいパトスの表出をもたらさずにはおかない愁いの種であるらしいのである[20]。そのパトスの表出の具合が尋常ではない。戦いに斃れた将の妻女が嘆くごとくに嘆くのである。ここでわたしたちにはアンドロマケの姿が思い浮ぶのではないか。『イリアス』第22歌でアンドロマケはギリシア方の陣営に曳かれてゆく夫ヘクトルの遺骸を目にして、ちょうどこの『オデュッセイア』第8歌523行以下と寸分違わぬ様子で泣き嘆く、「ヘクトル、わたしはなんという不運な女なのでしょう。〈略〉今あなたは大地の底の冥王の館へおいでなるところ、でも寡婦となって悲しみにくれるわたしを、屋敷に置いて行っておしまいになる。ともに不運なあなたとわたしの産んだ子は、まだほんの赤子。ヘクトル、あなたが亡くなっては、この子の力になってはいただけぬでしょうし、この子もあなたの御役には立ちますまい〈略〉」(*Il.* 22. 477〜515) と。彼女が虜囚の身となってギリシア兵の槍に追い立てられるのはいま少しあとである。しかしその姿もまた生前のヘクトルによってすでに予想されていた。『イリアス』第6歌454行以下がそれである、「青銅の武具を鎧うアカイア勢の何者かが、そなたから自由の日を奪い、泣きながら曳かれてゆく時のそなたの悲しみこそが何よりも気に懸ってならぬ」(*Il.* 6. 454〜55) と。

『オデュッセイア』第8歌523行以下に展開される直喩(シミレ)がオデュッセウスの涙のわけをほんとうに説明するものであるならば、あのときのオデュッセウスの心情はいまのアンドロマケのそれと同質のものであったことにはなるまいか。勝敗に関係のない、勝者敗者双方に通底する深い悲哀がそこには想定されている。勝者と敗者の心情は同じではない。しかしいまオデュッセウスは自分の勝利の歌を聞いて敗者と同じ涙を流すのである。敗者に同情して泣くのではない。敗者に成りかわって、敗者と同じように泣くのである。オデュッセウスの心中には敗者の心情と共通する悲哀が存在しているとしか言いようがない。それを表出するのが ἀχνύμενος

なる語であろう。Griffin は、寡婦像はこの上なく制禦しにくい悲哀を表わす直喩(シミレ)として用いられるとしてこの『オデュッセイア』第8歌523行以下を挙げているが[21]、オデュッセウスがここで敗残将兵の妻のごとくに泣いているのは、激しいパトスの噴出に襲われた――それはもちろんある――からだけではない。寡婦像は単に悲哀の程度の深さを表示する指標ではない。それは悲哀の質をも表示する。明らかにアンドロマケ像を想起させるこの直喩(シミレ)としての寡婦像の採用は、決して意味のないことではないのだ。ここには忌避の、あるいは拒否の意志がある。トロイア戦争が涙によってしか想起されえないということは、トロイア戦争という己の過去の10年間の体験を全否定することに外ならない。それはまず己の勲功の否定から始まるのである。

5．封印されたトロイア

オデュッセウスの流した涙、その悲哀を単なる泣きの涙ではなく、“生の根源までも掴んで放さぬ魂のふるえ”と言った人がいる[22]。これは些か大仰な物言いと、感じられぬこともない。ただこう言った Schadewaldt の心中には、先の世界大戦で負けて戦地から帰還してくるドイツの若い復員兵の存在が話の対象として想定されていた[23]。そこには肉体的にも精神的にも深い傷を背負って帰還してきた若者たちの姿があり、そしてその背後にはるかな昔これまた長い戦争を終えて帰ってきたオデュッセウスという一人の復員兵の姿が透けて見える仕掛になっている。戦場という非日常の世界を体験した者が感じる深い喪失感に勝者敗者の区別はない。勝者側にも敗者側と同じ種類の涙を流させるものは、勝者と敗者とを分ける境界線をはるかに越えた戦争そのもののもたらす深い悲哀である。そこにおいて敗者ドイツの復員兵も、勝者ギリシアの復員兵オデュッセウスも、そして寡婦となった敗残兵の妻女も、たがいに共鳴しあうのである。Schadewaldt の言う“魂のふるえ”とは、そのことを言うのであろう。詩人ホメロスは戦争の根本に神の邪悪な意図を考えるが[24]、この人間の力を越えた存在の思惑に振りまわされる人間たちが勝者敗者一様に思い至されるのが、この魂のふるえと称される深い悲哀に外ならない。トロイア戦争の中でも最も華々しい戦果の一つの木馬の計略と、それを歌わせたオデュッセウス本人の涙――この一見異様に思える両者の懸隔、このまったく相反する現象こそかえって涙の意味するものをよく伝えているように思われる。勝者が自らの戦果を歌わせながら流す涙は、敗者の妻女の涙のごとくでありながら実は決してそうではない。また敗者の妻女のごとくに泣き嘆くのであるから、オデュッセウスは決して勝者であるのではない。このまったく相反する現象は、そこに単なる勝者敗者を超越した悲哀、言ってみれば勝者であってまた敗者、敗者であってまた勝者という状況を自覚できる者こそがもちうる悲哀、戦争そのものが生み出す悲哀を想定しなければ説明がつかないのである。そしてこの涙はオデュッセウスの己の勲功への否定、そして戦争そのものに対する否定的評価の現われである。わざわざ勝利の場

面を歌わせながら、敗者の流す涙のごとき涙でこれを評価したからである。この涙は、いわば戦勝を美化することへの non の表示でもあろう。

さてここで、トロイア戦争が、あるいはその戦場となったトロイアの土地が、作品『オデュッセイア』の中でどのように扱われているか、ちょっとみておく必要がある。

デモドコス第3の歌を聞いて涙するオデュッセウスの姿をいぶかるアルキノオス王は、「あるいはそなたの姻戚でどなたか優れたお人がイリオス城下で討死になされたのか――婿であれ舅であれ、それは己れの血縁、同族に次いでは一番身近な者であるからな。あるいはまたそれは、そなたと心の通い合う、立派な戦友でもあったのか」(*Od.* 8. 581～85) と問いかけた。しかしオデュッセウスは、この至極もっともな疑問を無視した。このあと第9歌冒頭でオデュッセウスはまず己の名を名乗る。「そなたの国許では、御両親ならびに町の人々、また近隣の住民たちが、そなたをどういう名で呼んでいたのか」(*Od.* 8. 550～51) というアルキノオスの問いに応えてオデュッセウスは言う、「そこでまずわたしの名から申し上げましょう。〈略〉わたしはラエルテスが一子、その端倪すべからざる策謀のゆえにあえまねく世に知られ、その名は天にも達するオデッセウスです」(*Od.* 9. 16～20) と。そして続けて生まれ故郷がイタケ島であることを告げたあと、しかし「ではこれから、トロイエからの帰国の折に、ゼウスがわたしの身に降された、悲惨な旅についても語らせていただこう」(*Od.* 9. 31～38) と、一挙に漂流譚へと話を進めてしまう。アルキノオスが涙の原因と推測したトロイアでの苦労話には一切触れられないのである。身内か戦友が攻城戦の折に戦死したからではないかというアルキノオスの問いかけは無視される。ここでオデュッセウスの無視、黙過は意図的である。なぜ彼はわざと無視したのか。

トロイアでの10年間、そこで起った出来事、あるいはそれにまつわる話が意図的に避けられている例を、いま一つ挙げよう。それは『オデュッセイア』第23歌で、オデュッセウス・ペネロペイア夫妻がめでたく再認を果したあとのことである。二人は20年ぶりにかつての寝室へ入り、「心ゆくばかり快い愛の交りを楽しむと、今度は互いに身の上を物語りつつ語らいを楽しんだ」(*Od.* 23. 300～301)。まずペネロペイアが求婚者に苦しめられたかつての日々を物語り、オデュッセウスも「各所で相手を苦しめた手柄の数々、また自らが受けて悩んだ苦難を残らず物語る」(*Od.* 23. 306～308)。しかしこのときのオデュッセウスの話にはトロイアでの出来事は含まれていない。それは、すぐ次に続く「オデュッセウスは、自分が先ずキコネス族を討ったところから語り始めた」(*Od.* 9. 310) なる1行から明らかである[25]。

オデュッセウスは20年ぶりに会った妻ペネロペイアに、それが目的で家を出た10年に及ぶトロイア戦争のことは一切話さないのである。戦後10年、トロイア戦争はすでに物語化されてイタケの留守宅にも届いていたろう。アルキノオス王の宮廷ではデモドコスによってそれは歌われたのであった。求婚者らの宴会に登場する楽人ペミオスも、あるいは歌ったかもしれない[26]。

概略はペネロペイアの耳にも入っていたはずである。勝ち戦で、しかも亭主が大活躍する条りならば、より詳しい話を当の本人にねだっても不思議ではない。しかしそうした形跡は皆無である。夫も妻もトロイアの話は避けているかのごとくである。妻のほうは戦争の話は概略知っているから、まだ聞いたことのないその後の10年間の漂流譚のほうに興味が向くかもしれない。しかし夫のほうは20年間の不在を、いま故郷において、家庭内において、そして妻の意識の中において取り戻し、その存在を確認してもらうためにはすべてを語ること、不在前半の10年間の出来事も略すことなく語ることが必要である。それをしないと彼自らもそのアイデンティティは確認されないし、故郷の共同体への帰属意識も全うしない。しかし彼はそうしない。これはおそらく意図的である。何ゆえのことであろうか。

トロイアの話が意図的に避けられているとみられるもう一つの例を挙げよう。それは第1歌の楽人ペミオスの歌の場面である。求婚者らが開く宴会の場に登場したペミオスは、アカイア勢の苦難に満ちた帰国譚を歌う。それを階上の自室にいて聞きとめたペネロペイアは宴会の場へ降りてきて、他にもたくさん神々や人間の業を称える歌がある中で、そんな忌わしい歌は歌うなとペミオスを叱る、「その歌だけはやめておくれ、忌わしい歌じゃ、それを聞くごとに耐え難い悲しみが迫ってきて、胸がかきむしられる想いがする」(*Od.* 1. 340～42) と。しかしこういうペネロペイアを息子テレマコスが楽人に罪はないと制し、こうたしなめる、「この者がダナオイ勢の悲運を歌うのに腹を立てる謂れはありません。聴く者に一番耳新しく響く歌こそ、最も世の喝采を博するのです。母上も気持をしっかりと持ち、辛抱してお聞きにならねばなりません」(*Od.* 1. 350～53) と。ペミオスが帰国譚を歌ったのは、それが「一番耳新しく νεωτάτη 響く歌」であり、またそれゆえに「最も世の喝采を博す」からである。他意はない。しかしペネロペイアが言うように、他にまだ多くの歌があった。その中にはトロイアでの戦闘を歌ったもの、オデュッセウスの活躍を歌ったものもあろう。しかしここでは、『オデュッセイア』の中では、それは巧みに避けられている。歌って何の不都合もないはずながら[27]。

かくしてトロイアは、トロイア戦争は、オデュッセウスによっても、また詩人ホメロスによっても歌われず、封印されている。ただ第8歌のデモドコスの歌以外は。いや、正確にはいま二つトロイアへ言及した箇所がある。一つは第4歌でメネラオス、ヘレネが語るオデュッセウスの思い出話がそれである。中でも木馬の計略についてのメネラオスのそれは、デモドコスの歌と見事に照応している。後者は涙によって封殺された。前者はオデュッセウスの知らぬところでなされた第三者の評価であるが、もしオデュッセウスがその場に居合わせていたとすれば、第8歌の場合と同様、やはり泣いたであろう。いま一つは、第11歌冥府行の中 (504行以下) でアキレウスの亡霊の要求に応えてネオプトレモスの活躍を告げる段である。ここも木馬の計略が絡んでいる。同じ木馬の計略を第8歌ではデモドコスから聞いて泣いたオデュッセウスが、ここでは淡々と事実報告に終始している。この場合は状況がパトスの噴出を許さないのだとみ

なしてよかろう。『オデュッセイア』においては、トロイア戦争は無視されるか、それとも涙でもって封じ込められるかしかない。オデュッセウスがトロイアおよびトロイア戦争を自らの意志で語ることはない[28]。そして楽人によって歌われる物語化した戦争は、涙でもって封殺されたのであった。あの涙は、戦後10年かけて清算したオデュッセウスのトロイア戦争への最終評価である。

おわりに

それにしてもなお問題は残る。オデュッセウスはなぜトロイア戦争を語ろうとしないのか。そして物語化したトロイア戦争をなぜ涙でもって封じ込めようとするのか。

唐突だが話を第24歌最終場面に移したい。『オデュッセイア』第24歌は以下の章句で終りを告げる[29]。

「ゼウスの裔にしてラエルテスが一子、知略に富むオデュッセウスよ、今は手を引き仮借なき戦いの争いをやめよ、さもなくば、クロノスの御子、遥かに雷を轟かすゼウスのお怒りを買うかも知れぬぞ。」

アテネがこういうと、オデュッセウスは心嬉しく女神の言葉に随った。かくて、姿も声もメントルさながらの、パラス・アテネ、アイギス持つゼウスの姫によって、両者の間にはいついつまでも守るべき、堅き誓いが交わされた。(*Od.* 24. 542～48)

オデュッセウスが求婚者らを誅殺したあと、しかし話はそれで終らなかった。殺された者たちの親兄弟が復讐に立ち上がり、郊外にある父親ラエルテスの農場にいたオデュッセウスの許へ押し寄せたのである。小競り合いが始まり、アテナ女神の後押しを受けてラエルテスが投げた槍が相手方の大将格エウペイテスを斃す。そして本格的な戦闘が始まろうとしたとき、アテナ女神が両者間に割って入る。そこへゼウスの放った雷が落ちる。これを機にアテナ女神が両者を仲裁し、めでたく大団円となる。

留守宅を荒らし、妻に言い寄っていた求婚者らをオデュッセウスが誅殺したことは理に叶っていた。一方、殺された求婚者らの親類縁者が復讐に立ち上るのも、また理に叶っているのである。英雄と称される種族が棲息していた時代及び社会――それは氏族社会と呼び換えてもよい――は力の正義が通用する社会であった。力には力で報いるというのが掟である社会であった。息子アンティノオスをオデュッセウスに殺されたエウペイテスが言う、「わが子わが兄弟を殺した男たちに報復せぬのは恥 λώβη であるし、後の世の人に聞かれても恥かしい」(*Od.* 24. 433～35) と[30]。ここには恥の概念を仲立ちにした力の対決がある。力の強い者のほうが

正義の旗を掲げる。しかしこの力の対決には果しがない。力の正義が生み出す報復の連鎖は止まるところを知らない。そしてそれは不毛の連鎖である。その果しない連鎖にいまアテナ女神が、父神ゼウスの後押しを受けて楔を打ち込もうとする。押し寄せた求婚者の縁者らは、そしてまたオデュッセウスもアテナ女神の言を容れ、力による報復を断念し、以後不戦の誓を立てるのである。かくして共同体内の不和軋轢が、力ではなく話し合いで収拾されることになる。両者の間に「堅き誓 ὅρκια が交わされた」(*Od.* 24. 546) とあるのは、事件を収拾するための取り決めの誕生を意味するものである。力の正義に代わる法の正義とでも言うべきものの誕生を意味するものと言ってもよい。

オデュッセウスはいま新しい時代のとば口に立っている。トロイアとイタカ——空間的には万里を隔て、時間的には10年の歳月が経過している。この時空間の距離がオデュッセウスに新たなる相貌を与える。彼はトロイアから脱出した。英雄たちが棲息していた場所、社会を脱出した。その彼の眼の先には来たるべき新しい社会——市民社会とでもいうべきものが、ぼんやりとではあるが姿を見せ始めている[31]。そういう彼であるからこそ、もはやトロイアのことは黙して語らぬのである。第三者が拵えた「トロイア物語」を聞かされれば、涙でもってこれを封殺するのである。新しい時代に入っていくにはトロイアと訣別する必要があった。トロイアの英雄でありながらトロイアと訣別した男、それがオデュッセウスである。

註

1) 訳文は松平千秋訳 (岩波文庫) による。以下同じ。

2) 『トゥスクルム荘対談集』 2. 32以下。傷の痛みに泣き叫ぶピロクテテスはこれに欠けるとして、"強い男" とは呼べないとされる。ピロクテテスもトロイアに参戦した戦士の一人であった。なお上記の訳語は岩谷智訳 (岩波版『キケロ－選集』12) を借用させていただいた。

3) 『トゥスクルム荘対談集』 2. 33を参照。ここのピロクテテスはアッキウス『ピロクテテス』に拠っている。しかしソポクレスの描くピロクテテスも同様に傷の痛みに苦痛の声をあげたことを、わたしたちは知っている。ちなみにラテン語にはギリシア語にいう英雄 ἥρως に相当する語がない。強いて示せば vir fortis になる。

4) これまたキケロの指摘するところ。キケロ、上掲書 2. 20参照。ここでキケロはソポクレス『トラキスの女たち』1046行以下を翻訳して提示している。

5) この349行への古注には、「身分高い男は涙もろい」という諺があげられている。同趣旨のことがエウリピデス『ヘレネ』950～51行でも言われている。Cf. W.B. Stanford, *The Odyssey of Homer*, Vol. I., London, 1965, ad 8. 522.

6) キケロは、オデュッセウスに関してはパクウィウスの『ニプトラ』のそれを引きながら、種本となったソポクレスの『ニプトラ』あるいは『エイに刺されたオデュッセウス』中のオデュッセウス像とは対照的なその沈着冷静さを称揚している。キケロ、上掲書、2、48以下参照。また岩波版ギリシア悲

劇全集11、208ページ以下を参照。しかしいまわたしたちが扱うオデュッセウスはホメロスの描いたオデュッセウスである。

7）さらに Stanford は、第4歌541行のメネラオスの例もあげている。そして英雄が泣くことを異常なことではないとしている。Cf. *op. cit.*, ad loc.

8）これはトロイア戦中の一コマとみなされるが、わたしたちのもつ『イリアス』には収録されていない。古注は、ヘクトル死後イリオスを陥す方策の違いでアキレウス、オデュッセウス両者が宴席で争ったエピソードに言及している。また『キュプリア』（プロクロスの要約）によれば、テネドスでアガメムノン、アキレウスの両者が争ったとあり、このこともこの場とあるいは関係するものであるかもしれない。Cf. A. Heubeck, S. West & J.B. Hainsworth, *A Commentary on Homer's Odyssey*, Oxford, 1990 (1988), ad 8. 75.

9）この木馬の物語も現存の『イリアス』にはない。しかし楽人デモドコスがこれをよどみなく歌い上げるところをみれば、この頃にはすでに物語化していたことになっている、作者はそう設定しているとみなしてよかろう。オデュッセウスはトロイア戦争での自らの活躍を第三者の目に捉えられた物語＝作品によって振り返ることになる。なお第4歌265行以下も参照。そこではメネラオスが木馬の計略の段を讃歎している。

10）古注にあるように、もしもこのオデュッセウスとアキレウスの口論がトロイア城市を陥す方法――アキレウスの主張する武力 ἀνδρεία かオデュッセウスの主張する知恵 σοφία か――をめぐるものであるとしても、結局は木馬の計略を用いることになったのであるからオデュッセウスの主張が通ったことになり、この件でオデュッセウスが落ち込んだり、嘆いたり、怒ったりする理由はないことになる。Cf. Stanford, *op. cit.*, ad 8. 76.

11）すでに第4歌において、メネラオスも木馬の計略を敢行したオデュッセウスの功績を絶讃している（第4歌256行以下。注9を参照）。

12）Cf. Stanford, *op. cit.*, ad 8. 522.

13）ただアルキノオスには、いま涙している男が勝利したギリシア方なのか、敗けたトロイア方に縁のある人間なのか、不明である。いずれにせよイリオス攻防戦で斃れた戦士に縁ある人間とふんでいる。

14）Cf. *op. cit.*, ad 8. 73～74.

15）先の Heubeck らは、ホメロス作中で英雄たちが泣いて表現する感情にはかなり幅広いものがあるとして、恐れ、救済、心中の悩み、哀れみ、喪失感、不首尾、無力感などを挙げている。しかしオデュッセウスが木馬の計の場を歌うデモドコスの歌を聞いて（それは勝利の回想である）流す涙にあてはまるケースはないとしている。Cf. *op. cit.*, ad 8. 522.

16）*Il.* 2. 724, 5. 399, 6. 486, 7. 428, 431, 13. 344, 16. 16, 17. 637, 18. 62, *Od.* 2. 23, 7. 297, 8. 314, 478, 9. 62, 11. 88, 486, 558, 16. 139, 342 など多数。

17）Cf. Heubeck, *op. cit.*, ad 7. 297. ここでは第8歌83行以下、同521行以下、また第19歌115行以下も同様の例として挙げられている。

18）この第2の歌は次の第3の歌と、実は密接に関連していると思われる。オデュッセウスが自らの策略

を讃えてもらおうと木馬の計略の段をデモドコスに頼むのは、第2の歌のヘパイストスの策略（木馬と照応する網）に触発されてのことであると推測されるからである（このあたりの議論は小川に詳しい。ただ小川は、第3の歌が歌われてはじめてオデュッセウスは第2の歌との関連性に気づいたとするが、そうすると木馬の計の段を態々所望した意味あいが薄くなる。二つの歌の相似性をいうなら、最初からオデュッセウスは意図的に所望したとみるほうが自然である。小川正廣『ウェルギリウス研究――ローマ詩人の創造』京都大学学術出版会、1994年、205ページ参照。さらに付け加えれば、第1の歌も、古注を信じれば、オデュッセウスのドロス（策略）がテーマとなっていた。三つの歌は〈ドロス〉テーマで連関することになる）。しかしその結果は哄笑と楽しい気分ではなく、滂沱の涙となる。小川はこの涙のわけを、第2の歌で神々が演じる喜劇と第3の歌で語られる人間の悲劇とのするどい対照によって生まれてくる「人間の運命の不条理（上掲同書207ページ）」に求めようとするが、この論旨は理解できる。ただしかし、この解釈では第1の歌による涙の意味がいま一つうまく説明できない。第1の歌も含めて解釈するためには一段と広いパースペクティブが必要となる。

19) オデュッセウスが話を楽しみえたのは、我が身と直接関係ないがゆえである、と Garvie は解釈する。Cf. A.F. Garvie, *Homer Odyssey, VI～VIII*, Cambridge U.P., 1994, ad 8. 367.

20) Griffin は ἀχνύμενος なる語にパトスの表出をみる。その一例として *Il.* 15. 651 のヘクトルに討たれたペリペテスの僚友らが嘆きの情を抱く ἀχνύμενοι の条りを挙げる。Cf. J. Griffin, Homeric Pathos and Objectivity, *CQ.* xxvi (1976), p. 168. 同じ ἀχνύμενος なる語を使用するこの箇所も、パトス表出の場とみなされてしかるべきであろう。前後の脈絡から、デモドコスの第1、3の歌がもたらすオデュッセウスの涙をその具体的な内容とするとみなされるからである。

Merry はこの“鬱々たる ἀχνύμενος”気分の要因に第1の歌に喚起された涙をまず考える。そしてさらに加えて、アルキノオス王が約束してくれたイタカ送還が遅れぎみなことに対する苛々とした気分というきわめて即物的な理由をも挙げる。前者はともかくとして、後者はいかがなものであろうか。このオデュッセウスの鬱々たる気分は、むしろもっと内在的な理由によるものではあるまいか。Cf. W.W. Merry & J. Riddell, *Homer's Odyssey,* Vol. I., Oxford, 1886, ad 8. 477.

21) Cf. *op. cit.*, p. 172.

22) „Es ist eine Erschütterung der Seele, die bis an die Wurzeln des Lebens greift.“ Cf. W. Schadewaldt, Die Heimkehr des Odysseus, In: *Vom Homers Welt und Werk,* Stuttgart, 1965, S. 383.

23) Schadewaldt は、先の論考――彼自身は『オデュッセイア』の再話 Nacherzählung と称している――の前書で、これは1946年当時の復員兵を読者に想定した<青少年文庫>にオデュッセウスすなわち復員兵の原型を落すわけにはいかないという P. Suhrkamp の要望に応えて書いたものだと言っている。Cf. *op. cit.*, S. 375.

24) たとえばアルキノオス王の以下のごとき述懐にその一端がみえている。「(トロイアでの) 悲運は神々の設けられたもの、後の世にうたい継がれるべく、運命の糸を紡いで、人々に破滅をもたらされたものであった」(*Od.* 8. 579～80)。また『イリアス』冒頭は、アキレウスの怒りが多くの勇士たちをハデスへ送ることになったと歌い始められているが、それは「ゼウスの神意 Διὸς βουλή」(*Il.* 1.

5）のためであったと言い添えられている。さらにまたトロイアの老王プリアモスも言う、「わしの思うにはそなた（ヘレネ）に罪はない、責めはアカイア勢との悲しい戦いを、わしの身に起された神々にある」（*Il.* 3．164～65）と。

25）Cf. J. Russo, M. Fernández-Galiano & A. Heubeck, *A Commentary on Homer's Odyssey*, Vol. Ⅲ., Oxford, 1992, ad 23. 310～43.

26）ペミオスは第1歌で姿を見せる。そこでは英雄たちの苦難に満ちた帰国譚が歌われたとしている（326～27行）。

27）ただここでペミオスが苦難に満ちた帰国譚を歌ったわけは、いま一つ考えられる。それはオデュッセウスの苦難に満ちた帰国というこの詩篇の内容を先取りする形で、作品のテーマ提示の役割を担わせているのである。それは詩篇冒頭に置かれるべくして置かれているのである。それゆえここでは、それはトロイアでの武勲よりもやはり歌われるにふさわしい歌と言わねばならないであろう。

28）いや一つ例外がある。パイエケス人らと運動競技に興じる中で自らの弓術の腕前を誇る条りである、「トロイエの国に在って、われらアカイア勢が弓を引く時、わたしに勝ったのはひとりピロクテテスのみであった」（*Od.* 8．219～20）と。エウリュアロスから受けた侮辱に心昂ぶっていたこともあって、技倆自慢がつい封印の目をこぼれたということであろうか。

29）周知のように、本篇の結末を第23歌296行とする説（アレクサンドリア期のアリストパネス、アリスタルコスに由来する）がある。それが重要な問題提起であることは理解できるが、いまはこの問題には立ち入らない。わたしたちは第24歌548行をもって詩篇の結末とする。

30）加えてエウペイテスは、オデュッセウスがトロイアへ連れて行った部下の兵らを皆死なせ、自分一人だけが助かって帰還したことにも強い不満を表明している（*Od.* 24．427～28）。この、将たる者の戦争責任追求の問題は興味深いが、詩篇の中ではまず殆んど問題視されていない。ただここで一瞬わたしたちには『イリアス』第2歌のテルシテスの姿が想起されよう。トロイアが、英雄時代が次第に背後に遠のいていくことを気づかせる一つの兆しとでもいえようか。

31）Stanford は、英雄オデュッセウスが他の英雄と比較して食に対するこだわりの強い点を指摘している（たとえば *Il.* 4．343～46、また *Il.* 19．215～37）。Cf. W.B. Stanford, The Untypical Hero, In: *Homer A Collection of Critical Essays*, ed. by G. Steiner & R. Fagles, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N.J., 1962, p.124 ff. これはすでに『イリアス』においてオデュッセウスが日常志向の強い存在であったことを意味するが、この傾向は『オデュッセイア』において強まりこそすれ弱まることはない。そのことと相俟って、本篇では英雄的相貌に代る市民的相貌が、有力豪族としての存在はそのままとしても、その全体に現われつつある。彼が示す家族愛の強さはその一端であろう。ただ彼にはまだまだ古い氏族社会の家長――英雄と言い換えてもよい存在の残滓もうかがえないことはない。次の章句がそれである。「思い上がった求婚者どもが、散々に乱費した家畜については、大方はわしがまたどこからか掠奪してきて *λῃϊσσόμαι* 埋め合せしよう」（*Od.* 23．356～57）。英雄社会の経済的基盤、少なくともその重要な一部は、掠奪にあった。

（たんげ・かずひこ　外国語学部教授）